



奇說排悶錄
 卷四

13
 3143
 4

111



老用不 分 甲

吉田全吉

白紙を以てての書かんと欲
しむるは人の心を
たゞしき人にして
書かざる人にして
書かざる人にして

讀せらるる。誠漸長しと親の孝をり。兄を敬へ。兄ある訥が苦
 める。公忍びと陰の母を勸む。事無し。一日訥山へ入る。柴を伐と
 未終らざる。大なる風雨。値と。薪を負て帰る。母驗と。薪少と
 云と怒り。食を與へず。訥泣く。室へ入と臥居ぬ。誠師の家へを歸來
 と。兄が愁るる色を見と。病めやと問へ。兄餓と云と。其故を問へ。兄
 斯くと吉の誠聞と。公苦と。公去と。暫わりと。餅を懐ふ。來と
 兄の與ふ。兄いつと。持と。來つると。問へ。我竊小麥の粉を取往と。婦
 婦を借と。作ら。め。先食と。よ。斯と。言る。る。と。云。訥之を食て
 弟の屬と。曰。此後斯る。る。成爲と。若事。世る。汝を累せん。我一日の
 一度食せ。飢るとも死する。中々至ら。誠が曰。兄の故と。身弱く。おせ。

馬の柴を刈玉んと云と。其次の日竊小山の柴と。兄が樵する所へ
 至る。兄見と。驚と。汝來と。何を為と。問へ。答と。曰。木は樵を
 助えと。兄が曰。誰が汝を遣へ。弟が曰。我自來と。兄が曰。汝
 り。薪を携る。る。成る。えん。や。能と。猶不可あり。速
 歸と。と。云へ。誠聽と。柴を断と。兄を助と。明日の斧を指
 と。來んと。云へ。兄之を止めと。弟が指を見と。血出と。履も穿と。兄
 兄悲と。曰。汝速に歸らむ。我斧を以と。自到と。死と。云と。誠
 誠是非と。歸る。兄之を半途と。送と。再山へ歸と。樵を。歸
 時誠が師の家へ至と。曰。吾弟。幼け。能之を困玉と。山へ入る。夏
 を止め玉と。虎狼の恐と。あわと。云へ。師言ふ。午前何く。往と。故

者あり。訥夢おちりぬ之小遇と第が行方を問ふ。巫我聞事ありとて
 訥を導く。往時一息を著る人の城中に居るあり。巫此人に向く
 城がる。我問ふ。鬼人佩る。囊の中より。牒をみかへんと。三日の中
 男女死せる者百餘の中。張氏ある者あり。と云。巫疑く。若他の牒の
 内やあると問ふ。息人の曰。此筋は我支配する。何ぞ差ふ事あるん
 訥信せざ。と云。巫を強く。城中へ入る。城の中皆死失せ。者法を
 往來しくあり。故識する人。汝死すと就く。弟を問ふ。未だ死せざといふ。
 時の詳く。菩薩至り。玉言ふ。死すと云。空中の偉人あり。毫光上下
 不徹せり。巫訥を挫く。跪く。衆鬼。騰る。声地を震はす。菩薩揚
 枝を以て。徧甘露を洒る。其細なるる。塵の如し。散れ。とて。消す。

如く失せり。訥我割の上。露をうり。とて。痛を忘まぬ。巫又導て
 俱に帰る。来ぬと覺え。死すと。二日あり。竟に甦る。父母に向ひ
 とく。死する所を告ぐ。誠死せざ。とて。在り。と云。母あま。造り。言ふ。いと
 云と。及く。罵り。耻む。訥創痕を損む。良に瘥む。力と。起出。父を拜
 しく。曰。我今。去と。雲と。穿ち。海へ入。戒を尋ねんと。弟。逢る。
 ぬ。我。再。歸。願。父。見。を。以。死。せ。り。と。云。父。王。と。云。翁。入。無
 所。引。往。共。泣。別。ぬ。其。普。此。處。彼。處。と。尋。あり。死。す。畜。へ
 盡。之。巧。を。行。り。年。を。逾。金。陵。地。の。達。り。け。る。衣。皆。散
 是。道。の。傍。背。を。曲。く。物。を。乞。り。き。る。官。長。と。見。え。人。數。ヨ
 具。馬。使。せ。過。る。人。名。訥。走。り。側。に。避。居。け。る。其。中。小。駟。小

乗る一少年あり。屢訥を顧み玉へ。訥其貴公子たるを以て仰ぎ
 視るる成せむ。少年の人馬を駐め下り來て呼ぶ。吾兄のあむ
 やと云ふ。訥首を卷く審視せしめ誠なり。嬉しく走らむを
 取て声
 か計泣く。誠も泣く云々。兄何漂落しと斯く成玉へ。訥其
 情を言ふ。誠益悲しく官長命し。訥を馬に
 載せ。誠と轡を連移り。歸玉ひぬ。初山中ゆく虎の啣去る時
 あり。誠も知らず。氣を失ひ。一夜
 臥居る。適張千戸と云ふ人來て。此を過るが其貌文あり。我
 兄と憐れむ。抱せしめ。漸く獲る。叔載り共歸
 傷處を療治せしめ。日を経て全く痊る。千戸子無り。其

誠を子とあつり。今日訪はせ。物見ぬ。想へし。納め逢る。誠
 道を尋る。次第を逐一。訥詰る。斯く千戸納め對面を訥拜
 謝しく。已む。誠綿衣を捧ぐ。兄進め。酒を設け。物語を千戸
 問ふ。貴族の豫名。汝の父の幾とぞ。訥曰。親族ある。父の
 原来存名あり。が流寓し。今豫止まり。千戸曰。僕も亦存
 人あり。何の里に居る。答曰。曾父の言と承り。東昌地
 轄に属せりと云ひ候。千戸敬馬と曰。さて。我同郷なる。何の故
 小豫の移らむ。訥曰。前母のこの掠め。家ハ火。火は
 家産を失し。時先西道名。賈し。往來。所なる。遂
 小彼處止り候。千戸の。敬馬と君が父の名。いと問ふ

訥之を告む。千戸は深く顔を視て立ち内へ入る。何れも
 受く。大夫入出く訥の向く日。汝は是張炳之が孫なりや訥然と
 答へ大夫入目を受く。千戸の向ひ。此汝が弟ありと云訥兄弟
 其意を解する事あり。大夫入日我汝が父の嫁一と三年あして流
 離しく北の玄。身指揮役人の何某の属一と半年あして汝が
 兄を千戸と生め。又半年を過し指揮死ぬ汝が兄父の養を以て
 此官の遷り。今任を解り我常々郷里を念く屢人を遣く齊
 らしむ。見ざる所あり。何ぞ知らん汝が父西の徙まり。西の豫園の
 と云く始終を詳の語や。齒を以て序を千戸四十一の最長
 誠十六歳中。最少あり。訥八年二十の千戸中。中ぞありぬる。

千戸兩人の弟をえと。惟るのわらう。こちのむと共臥處を同くし。と
 朝夕親睦有り。叔共の帰る。愈え計を作。時大夫入牛氏の容と
 ざる。大夫入の張氏が妻あり。今令の妻と。千戸日聴し。正共
 住む。否玉の家を折つ。天下豈父無の困わんやと云。是於
 と宅を鬻き装を辨。日を撰く。西至る。豫園の趣有り。既其里の抵
 ま。訥誠死く父の報。父の訥が玄と。妻も尋く死く。唯
 一人あり。影く。外小伴ふ人も無。想を存。訥が至る。死
 と喜ぶ。其終。死せりと想ひ。誠も帰来。愈
 愈敬馬喜。物もの。程もわ。千戸母子。至る。と
 告る。翁涼を輟。わ。喜も。悲も。

立ちまごひとぞ居る。千戸ハ入と父を拜む。大夫ハ翁向ひと哭
より外す。此時媪婢斬卒入来と内外ハ堅し。公翁が家ハ居
あまのり。庭のあまのりやまご立ちまごぞ居る。誠母をうんごまハ父向
けるハ死せりと云へ。蹄嘶と岡絶し。漸ハ魁々。千戸財をかくと
樓閣を建つ。師を招と両弟を教させると。馬ハ槽めどり入ハ
室ハ満ごまご。あまのり大家の風ぞ備で居る。

武君仕

河南沛川名の人ハ武君仕と云人あり。其兄ハ君相と云り。少して
縣尉代官の燈籠夫とす。尉怒るるのまご之を責ま。尉ハ向と
曰。丈夫ハ殺まへ。辱むむらうまごと云々。遂めま。軍ハ従と往々。

ヨク戦の功あり。君仕ハ驃騎將軍の軍ハ至。君相ハ遊撃將
軍の名ハ至。君仕嘗と孫可望ガ敵將ハ軍數十萬ハ對。軍
騎ゆと二十餘人を率と陣を陥る。賊ハ敢と逼らむ。兩翼ハ
を張と之を圍め。一騎還来と君仕ハ死し。王と告げれば
君相聞もあまのり。稍を奮と賊軍ハ走。入る。賊恐ま。近る者
る。君ハ賊を數ヲ殺し。後より出。君相ハ斯共知らむ。東西ハ擊
と廻る。君仕も兄ガ出。復馬を躍らむ。陣ハ入と。兄ハ弟
兩騎數十萬の賊中を突と回。賊皆聲を奪と。真の漢子ハ誠の
ありと。ちりと譽け。又一日君仕賊と戦と。飛礮ハ中らむ。血流ま。面
めうま。即馬上ハ在と。帛を裂と。之を裹。礮を飛せ。賊ハ

生擒と帰す其體を食たり其勇敢此の如し嘉善地の徐岳と云
人此傳を書き余を見聞録に載あり徐岳此君仕と同年ゆと突
亥の生ありたる一日燕坐して君仕が臉上の青癩をえと何ぞ斯
累く之と問ふ君仕徐岳がひを引く之を按せたる内を皆
細る鉄珠子あり又衣を掲て腰肋の間を示さふ鉄珠大く垂くあり
背上傷痕鱗の如し徐岳も興さると實に百死の中を経る男あり
けりとぞ感とる

達州民

四川の達州細の民某と云者兄弟二人甚友愛せり弟年十二空成
娶らむ他出しく有るふ其兄身を賣と十二金を得る弟の為ふ

婦を娶らんとて聘を遣り弟歸す婦を娶ると兄が身を賣り
るが知と兄と相持とはるるさく其婦を母の家小遣り原の聘金
と取り免兄の身を贖へんとて湖南地の流民二人其事を知り
婦小尾と姓と中途中婦を撃死し其金を攫と去らんとするふ
俄に迅雷大震二人を撃とく立とるふ斃せり其尸共婦が家の門
小跪と中の中十二金をおと居り頃ありと婦復甦と其家小歸至
二の者早門外小跪とぞ有る婦其故を語りけり兄弟への
よも鄰里列人來と觀る者堵の如く堵の如く嘆とて異とせざる者無し
仇大娘

仇大娘

仇仲の晋名の人あり其郡邑を知らざ世の亂に遇と寇あり

倭へらむ。契乎らむとて性ぬ二人の子あり。兄を福と云ひ弟を禄と云と
 共ふ初。継室へ邵氏あり。二人の子を愛と育えと云。幸ふ貴業
 全くと飢寒の憂あり。然るも連年飢饉うち續々上ぬ。豪
 強ある者女主ちう成悔と。無理を志すかきめ取る事ヨリ。仇が
 叔父尚廉と云者あり。其嫁せんのを利と。屢勸せども。邵氏
 志を矢と揺と。邵氏邵氏ありて嫁入せさせと尚廉陰めある大姓とて金
 を取て券を遺と。邵氏を強と大姓を送らんとしけ。又茲も同地
 人の魏鳳と云者仲と昔より不和あり。仲が妻の邵氏寡と
 成たるを見と。さるる字言を造りて言弘と云。大姓聞と邵氏と
 不徳ありと嫌と迎る夏を止る。邵氏慚ありと聞知と共寛と

述る小所あり。獨うち歎と朝夕涼を預し居る係が。立見の病と成
 と四隣自在あり。床榻のぞ臥居る。福年十六の成けとを急死
 婦を娶らせと。妻未老女秀女前ある肥膽が女あり。性賢能小
 しく経紀小賢と。家中小中いよく裕あり。弟の禄をた
 師小従へせと書を讀せと。魏鳳いよく忌嫉と。陽中睦くと
 頻小福を招と酒を飲せと。其間小乗と。曰尊堂病玉ひと生産
 を理る事能はむ。弟坐ちと食を且婦を取らばいよく大耗と云
 也。君が為小計る小早く家を折んぬ如くと勸む福歸と婦小
 謀る小婦ありと死事ありと叱りて母小告ぬ。母怒りて詬罵と
 福も下小志と。輒家ある金錢を他人の物の如く思ひと。漫小之成

非因録卷之四

十一

の状を知りて。彌哭く息絶る不に至る。弟の禄時小年十五あり。只一人のわらわ成まふ死方なり。是より先仇仲が前室の生る女大娘とて。わらわ遠郡に嫁し往す。其性剛ゆゑ。男小やこまると。歸寧しと父と忤く憤り帰る。父の仇仲も之を悪く。且道由遠より年を経まじも存問も為さる。邵氏危なる望々不魏。夙日の大娘を招るが必定争ひを起ましと思ふ。商人の便を語を寄ると大娘小告遣り。果しく大娘少子を挈至すと門内入る。幼弟一人母の看病し居り。家のさやわはさ寂しげなり。弟の福はと問ふ。禄備ぬ之を告ぐ。大娘忿氣叱り塞す。曰。家小成人無し。斯やと人の蹂躪まら不に至る。吾家の田産諸賊何ぞ賺めたる。

るが得んと。念く出く邑に詣り。状を呈し訟ふ。諸博徒大に恨み。金を出し大娘を賂入大娘。其金を受く。仍之を訟ふ。邑令博徒の何某等を拘各杖を加へ。是を田産の事ハ置く。問はざるとも。大娘子を牽く。郡守小かと訟ふ。郡守最博を悪く。玉入上。大娘委く。寡家の力あり。悲死る。又惡徒共の工小逢し。次第を述べ。郡守大動し。書付を以て。邑宰命し。田を以て仇氏返す。給へ。仍仇福を免む。るをく。不肖を徹めよと。邑宰命し。我奉る。穿鑿あり。之を故の産盡返す。大娘已久く寡なり。乃少子を遣り。家小歸ら。且從兄小囑し。業を務め。復來る事。あつと云付。此より母の家小止す。母を養ひ。弟を教ふ内。

外よく治く母の心大の慰く病も漸瘥る小至まを。家務ハ悉大娘
 小委ねるも。里中の豪強少く凌暴せんとまを。大娘刀を取く其家
 又至まを。争ひ論じく屈服させ給る事なり。斯く年々まを。細産日
 小増豊三あり多る。時々薬餌珍育を買く美女のゆえ醜で遣多。
 又祿が長成せるを見く頻小媒小囁く。之が為小婚を不見めまを。魏
 夙人小告く曰。仇家の産業悉大娘小属せり。恐らくは将来復返下
 と云まを。人皆之を信じく婚をせんと云者まを。此小范公子
 子文と范氏子文ハ字なり。ま入人有。家中小名園あり。晋第一晋の中園あり。
 園中の名花路を夾く直小内室小通せり。或人知らざり。誤く燭小
 入公子の私宴の處小至まを。怒り執へく盗ありと云く。杖ゆく

死ぬる打め。事あり。時小清明とく三月の節あり。祿師の家
 より帰るまを。魏夙誘く共小遊びく彼園の所小至まを。魏のこまを
 園丁を相知くまを。園中入くまを。調く亭榭を。和名抄云亭ハ
 曰臺有屋曰榭和名ウテナ。歴く一處小至まを。溪水白勇く。画橋朱檻
 あり。一の漆門小通せり。庭小門内を望め。紫花錦の如く。是公子の
 内齋あり。魏之を給く曰。君請先入。我彼處ゆく。扇小用く。往ん
 とく。別はぬ。祿心つるを。往くる小一院あり。女子の笑声聞こ。一人の婢
 せ。窺見く。即返入ぬ。祿始く駭奔らんとまを。公子出来く。家人と
 北く之を逐へまを。祿大。小窓らまを。せんま。無く。自突中。小身を
 投くも。公子怒を逐く。笑とる。諸僕小命く。引出させ。其容のとガ諸雅



華本繡像模圖



大娘
 躬往く
 仇家の
 衰へ成
 救ふ

入贅と成事能へどと云ふ公子姑歸と謀り王へと。遂に圍入を遣
 と濕衣を負せ馬に乗て歸りて。禄歸り来と母の告げを。母
 驚ると余てのるの不祥とを。是れ至りて始と魏氏が公の恐れたる
 を知りぬ。さきと凶因りて吉をえ。其後おさし置く。斯る者
 あり遠ざかりと。交る夏勿と母戒る。數日を踰と公子又人を来ら
 しめく母の言ハハハ母終る所がむ。大娘之を應と。即二人の媒を借
 と納采の禮を有。日を撰と公子の家へ入贅とす。年比有と禄
 學問の長才名も世の聞えり。妻の弟生長しけり。惠娘が弟生長
 禄婦を携りて家の歸りぬ。母病少く息と杖の倚りて歩行せり。大娘
 の經紀の頼りて第宅も完る上。新婦へ来と婢僕雲の如く。さきと

大家の風をけし不魏之をえと益嫉めどし害を送る。むらり
 時小巨盗あり。事発と遠地へ遣りて。時禄と財を倚りてと誣と。是
 と魏が計る所ありと。禄の関外へ。外へ追放とす。彼さるむらり
 田産の盡没收せり。と官庫へ入る。范公子上下の賄りて。僅に惠娘
 を免り免る。幸に大娘産を折の書を執りて。官へ申しと母子
 火を免り。新増せり。良田許りの来福が名ありと。けし母女
 始と安し居る事を得り。禄又え返るや。身ありと思ひけしを。
 離婚書を寫と岳家へ遣り。獨北都をゆりて往々。旅肆の戸外
 小丐子の乞ふと。と見え。貌よく兄の類せり。近づくと問ふ。果して
 兄ありけり。兄弟相共ありと。取ると有。とる。彼語りて。位あり。禄衣を

解金を分ち福小與へ早く家小歸り玉へと言ふ福之を受く位々
 別ぞ往る所。祿の關外小至と將軍の帳下小
 一卒と成しが文弱ちまは文籍のる家主ぞうしめ諸僕と同一棲
 一む僕が輩相共小家世を研問夏る小祿悉之を告ぐは内一人
 敬馬く是吾見あると云ふ是ハ父ある仇仲也初め殺小
 捕ら馬を牧く有しが寇逃竄去く後遂小關外小徙と將軍の僕
 とあるとけり。祿小向と其由を語まは始と真の父とるの成知P。首を
 抱と悲哀し且相喜る。幾むもわくく將軍巨盜數十人成獲
 けり。内の一人の曩の時魏小頼やと祿を誣る盜魁ありるれを父子位
 位將軍の詔ふ將軍之が為小寛を雪が上關小建しけは上より地方官

小命せしと。没入しる仇氏の田舎を返し玉へる仇父子喜ぶ事
 限る。祿々妹共をてぞ歸りて。叔兄ある福ハ弟小別とて家小
 歸り蒲伏しと入る大娘母を堂上よ坐せしめ杖を取と福小向と曰
 責を受んと願ふ姑留むる。然らばんを早玄命。福泣と地小伏
 願ぐと答を受んと云大娘杖を投すと曰婦を賣程の人あるを
 懲せぬも足ら。宿案未消せざるも若再犯さば官より首先
 とく即人を遣と美女小告ると美女罵と曰我を仇氏の何人と
 必玉ふふ。あつるの成聞知るしとぞ云る。大娘此の成折と言せ七
 福をあざけりてあづりて福慚と敢と云る。居る事半年と
 大娘福小衣食等を恵むるハ丁寧とせども役をさしむらつる

一非國泉

一八

僕と同じくせむ。福出精しくいさゝら怒める色あり。金錢をわらふを
 共聊も苟あらず。大娘其他無き哉察しと母白し。姜女を求め
 と復歸せしめんと云ふ。母恐らくは返し難うんと云へ大娘
 曰然とむ彼女。二主又事る心あり。曩の自害をば理あり。然も
 福の賣とるるの心無し。非トと云く。大娘遂に福を奪と。
 躬往と負荆をちり。岳父母きびしく福を責とす。大娘叱と張
 跪せむ。斯と姜女小見えしめんとする。再三云へ共女出む。大娘内
 小入さし捉と之を出さ。女福をえと罵と責む。福汗よむとく
 居るの堪む。姜が母始と福を曳と起と。大娘歸るを死日を問ふ。女
 が曰向小姉の惠を受ふ事厚し。今尊命を受と。豈異言のん

や但恐らく此入欺さるの心を保る能は。且恩義已絶しと
 何ぞ腹黒ある無頼子と共に世を渡るを願と。別室を構
 と妾を置王の。往と老母小事へん。然るに尼と成る勝と。大娘
 福小代と後悔を述。翌日と云約をちりて歸る。翌日乘輿を遣り
 と姜女を乗と歸らし。母門の立迎と跪と拜と。大娘地伏し
 と大娘哭も。大娘之を勧と酒を出しと歡と。福を案の側小坐
 せむ。大娘爵を執と言と曰我苦争へし。自を利と。非と。今
 弟過の悔負婦復還る上。薄藉を渡し。ちるらせん。我一身を以と
 来と。仍一身を以と去と。んと云ふ。夫婦席を紀容を改て拜
 一泣と止む。大娘夫婦が止むるを任せと止むる居ける。月夜経と

とく禄が宛の頭とる命下り。數日あるごとく田宅悉故主の
 ぬ魏大ぬ駭と其故を知む。自術の復施を乞ふるの無を恨む。時
 思ふごとく西鄰の火あやしく焚出ぬ。魏火を放ふ。托しと往と暗ぬ
 禄が家ぬ火をつけと焚えんと。風暴起り延焼しと大方焼盡せり。
 止福が居西三屋を餘せり。家拳と其中ぬ聚りとぞ居る。斯る程
 ぬ禄帰來とる。皆と相見と泣喜るの甚初め。公子離書を得と
 蕙娘ぬ見せると。蕙娘痛哭と引裂と地ぬ廢り父其志ぬ従と
 復嫁を言むと。わかれ禄帰と女のやと嫁せむと彼と。喜と岳の
 所ぬ往ぬ。公子其家の焚とる。我知りと。留んとと。共禄辞しと。退死
 屍ぬ大娘幸ぬ。蓄とる金わと。と。敗る堵をつくり。福錦

を買と。自營菜くと。錐を埋し。害ぬ掘わとぬ。夜弟と共ぬ之を
 發け。石池一丈計ぬ。いと盈貯へ。と。是ぬ由と。工ぬ命と。大又
 樓舎を作。壯麗ある。類ぬ。禄と將軍の義ぬ感。十金をそ
 る。父と往と。父を贖へんと。福我ぬ。住ぬと。清と。出立け。健
 る。僕を添と。遣る。禄ぬ蕙娘を迎へ。昔の如く睦し。居る。我
 る。わかれ。と。父兄同く。歸り。來ぬ。門の款び。言ぬ。愚思る。大娘母
 の家ぬ。引致せ。と。わ。我子を禁と。來る。の。あ。と。私わ。と。人
 の疑へ。ん。る。我恐と。父既ぬ。歸。と。堅く。辭し。と。去ら。んと。云。と。兄
 弟之を。聽者ぬ。父乃。縫を。三ぬ。折と。二を。兄。弟ぬ。與。一を。大娘ぬ
 與ぬ。大娘固辭し。と。受。と。六兄。弟は。と。曰。吾等。姉の。わ。と。争。今日

わんと言ふ。強く之を勧む大娘漸わよく兼引ぬ其子と子を招
 きて家小移し共住けり。或大娘小問異母兄弟の為志成
 尽き事何ぞ斯なる切なるや大娘曰母有る事を知父有る事
 知らざる。是禽獸なる。豈人より之の效らんやと云ふ。福祿之を
 皆涕を流せり。工人を以て其弟を作らせり。悉已と等しく建
 けり。魏夙自思ふ十餘年以來仇家小禍を成えと云ふ。皆福と
 成す事多し。深自愧悔又其富を仰ぎ。之と交を為さんと
 種々の品を仇仲が方持行と賀を述べ仇仲が雞酒の受
 々係小此雞布を以て足を縛り有しが逸して竈入る。其布
 又火つた。然るも其儘飛と積る薪の上止まり居る。其布散りて

焚あがりて舍小少はたぬ。幸小人ヨクゆりて撲滅けし。厨中の
 器物ハ皆焚失ぬ。其後仇仲が壽の賀の時魏又羊と贈り来り。之
 之を返さんと云ふ。共小あはれ。羊を庭の樹小敷に置ると夜
 の僕又毆とるが念と樹下小往り。羊の索と解と経て死小けり。兄
 嘆とて曰其之小福なるを之は禍なる小如ぞと云ふ。其後魏が方
 小殷勤と言ふれども其ち小一を小受付けり。後魏老と貧く
 小と巧と作せし。小憐と布粟と小惠と與つ。恩を以て報る。
 童氏犬

咸溪地名の童鏞が家小二犬を畜へり。一は白く一は花ある。共小一母犬の
 生む所あり。性狡猾し。人の意を知り。後白犬忽目盲なる。

小依^いに牢^{らう}の入^{いり}と食^く事^じ能^よへど。主人^{しゅじん}草^{くさ}と簷^{えん}下^かの籍^{せき}と臥^ふさむ。花^{はな}犬^{いぬ}
 日^ひの小^こ飯^{いひ}を啣^{くは}む。往^ゆと吐^はく之^をを飼^かひ。夜^よを其^{その}側^{そば}に臥^ふさむ。白^{しろ}犬^{いぬ}死^しぬ。け
 れバ。主人^{しゅじん}之^をを山^{やま}の麓^{ふもと}に埋^うる。花^{はな}犬^{いぬ}朝夕^{あすけ}往^ゆと其^{その}處^{ところ}を遠^{とほ}る。救^{すく}廻^{まわ}と
 泣^なく拜^ひする。其^{その}傍^{そば}に臥^ふし時^{とき}を移^{うつ}る。返^{かえ}り去^さると。

奇説排門録卷之四了



今^{いま}まもていかにしよとての^た家^け業^{ぎょう}
 所^{ところ}は人^{ひと}品^{ひん}物^{ぶつ}をそそむ。六^む年^{ねん}を
 いしねむの^いれ。あな
 中^{ちゆう}に^{ちゆう}あ^あ成^{せい}し^し即^{すなは}ち^ち出^でる
 身^みに^にた^たら^らし^しん^んと^とし^しん^んと^とし^しん^ん
 祢^ねの^のい
 六^む日^{にち} 六^む田^{でん}を^を入^いる

高き子也一孝子 采高城しり
忽との情なき 法中 為紙に戯画
采高城也一孝子 采高城しり

初分多の事

孝母恩

44000026

